

『大日經』住心品における真言門の位置づけ ——六無畏と〈三劫〉に基づく考察——

馬 場 え つ こ

1. 問題の所在

これまで、『大日經』¹⁾の研究は、善無畏と一行とによる『大日經疏』²⁾(以下、『經疏』)やブツダグヒヤ(Buddhaguhya)の『大日經広釈』³⁾(以下、『広釈』)などの注釈書に基づいて進められてきた。しかしその反面、『大日經』の文章そのものからこの經典の思想を汲む試みはほとんど行われていない。

この『大日經』の構成や思想を漢訳・Tib. 訳双方の文脈から読み解くことが筆者の大きな目的である。その試行過程で、本經の思想面を代表するとされる住心品と実践に特化した具緣品その他の章との思想的な関連性を探るために、住心品が真言門の菩薩の修行体系をどのように構想していたか、把握する必要を覚えた。

そこで、住心品中のいわゆる〈三劫〉⁴⁾段と、これを要約したものと見なされている六無畏との対応関係を検討し、住心品の構想した修行体系内における真言門の位置づけを探ることにした。注釈書はいずれも、これら〈三劫〉と六無畏とを、凡夫から真言門の菩薩に至るまでの諸段階に相当する一貫した縦軸と解釈している。ならば住心品の修行体系もまたこの〈三劫〉と六無畏に反映されているはずである。しかし、検討の結果明らかになったのは、注釈書の見出した一貫性、すなわち、真言門を頂点とする修行体系が成立しない可能性であった。

以下に問題の概要を示し、筆者の見解を付して研究報告としたい。

2. 六無畏と〈三劫〉の対応関係における問題点

六無畏(1. 善無畏, 2. 身無畏, 3. 無我無畏, 4. 法無畏, 5. 法無我無畏, 6. 一切法自性平等無畏)の各段階はおおむね、直前の段階を否定することによって縦に向上する階層的な構造である。これは5. 法無我無畏と6. 一切法自性平等無畏の間の関係も同様である。しかし、この2つの段階と対応すると考えられてきた〈三劫〉の該当箇所と対照してみると、この六無畏が住心品の単純な要約ではなく、〈三劫〉とは異なる構造を有していることが分かる。

(100) 『大日経』住心品における真言門の位置づけ (馬 場)

まず、5. 法無我無畏とはその名の通り法無我を獲得する境地を指す⁵⁾。しかし、これに対応すると考えられてきた、〈三劫〉中の「瑜祇 (Tib. 訳: rnal hbyor pa dag ヨーガ行者たち)」による二劫超克の段階を説いた経文は、法無我をも捨て去って自心の本不生を覚るまでを含んでいる⁶⁾。そのため、「法無我」無畏との正確な対応関係を認めるには整合性を欠く。これをもし、5. 法無我無畏には法無我到言及した箇所のみを当て、自心の本不生を覚る段階は次の6. 一切法自性平等無畏に組み入れるように操作するならば、この問題は解消するだろう。しかし、注釈書の解釈に基づく限り、そのような解決法は取れない。何故ならこの法無我到自心の本不生とを覚る段階は真言門とは明確に区別されており、さらに6. 一切法自性平等無畏は真言門の菩薩の段階のみに対応するものと解釈されるからである。

6. 一切法自性平等無畏⁷⁾は、菩提心修習思想との関連からも重視されるべきものである。この一節と極めてよく似た定型句が、菩提心修習の手順と密接に結びついて、瑜伽行中観派の論師 Jñānagarbha の『瑜伽修習道』⁸⁾や、『秘密集会タントラ』⁹⁾、このタントラに関連する Nāgārjuna の『菩提心釈』¹⁰⁾に登場する。また、『大日経』付属の儀軌である漢訳の第七卷¹¹⁾や Tib. 訳の外篇¹²⁾でも、発菩提心に関連して言及されている。(ただし、『大日経』本体には登場しない)

以上の例を考慮すれば、6. 一切法自性平等無畏を、「初心 (Tib. 訳: byañ chub kyi sems dan po 最初の菩提心)」が発生する真言門の菩薩の段階に対応させることは妥当であるように見える。また、法を空・無自性とすることが法無我到あたり、「無縁 (Tib. 訳: mi skye ba 不生)」を空・無自性とすることが、法無我到捨てた自心本不生の境地を更に否定して次の段階に進む意図を持つならば、この6. 一切法自性平等無畏の一節は、自心の本不生を覚るよりも更に上の段階、すなわち真言門の存在を示している、とも解釈できるだろう。しかし、これに対応するとされる真言門の菩薩の「極無自性心」を説明した文脈¹³⁾には、空・無自性という極論に近い言葉以外に、第六の無畏と共通する用語が一つも見当たらない。また、直前に説かれた段階との関係にも全く触れていない。それ故、この6. 一切法自性平等無畏を真言門の菩薩の、特に菩提心発生段階に確実に対応するものと認める積極的な証拠は示すことができない。このことは、六無畏と〈三劫〉とが単純な一対一の対応関係にないことを示している。

3. 〈三劫〉は縦の関係か？

一方、〈三劫〉を一貫した縦の体系と捉える理解は注釈書に基づく。『経疏』は

劫 (Skt. kalpa) を「妄執」と読み、三妄執を超克することで初心を得ると解釈することによって¹⁴⁾、『広釈』は信解行地を二劫の段階に組み込み、真言門の最初の菩提心を初地に位置づけることによって¹⁵⁾、それぞれに真言門を頂点とする縦の体系を構築している。

だが、住心品の文脈上、法無我と自心の本不生とを覚る二劫の段階を乗り越えたその上に真言門がある、と解釈する確証は見出せない。主な問題点を挙げれば、

1) 内容に連続性がない。自心の本不生を覚る段階からどのようにして真言門へ進むのか、説明されていない。もし、真言門の菩薩の始点や菩提心の発生が、自心の本不生を覚るのと全く同等の境地であるとすれば、上下や前後の別は問えない。むしろ、両者は並行して存在する別個の修行体系である、と推測するほうが妥当であろう。

2) 修行主体の呼称が違う。一劫・二劫を超越する修行主体は「瑜祇¹⁶⁾ (Tib. 訳: rnal hbyor pa dag ヨーガ行者たち)」であり、「真言門より行をおこなう菩薩」とは区別されている。真言門を立てることで自心の本不生を覚るに至るまでの一連の展開が一旦断ち切られていることから、修行主体の呼称の違いは修行内容・修行体系の違いを反映していた可能性がある。

3) 注釈書による信解行地理解が変則的である。『経疏』は信解行地を浄菩提心発生以降の十地全体に相当させ¹⁷⁾、『広釈』は初地である真言門の菩薩の菩提心発生よりも前段階に信解行地を置くために文章の順番を入れ替えて読んでいる¹⁸⁾。しかし、真言門を縦の体系の頂点に据える必要が無ければ、記述の順序通りに真言門が信解行地から始まっても問題は無い。

4. 小結と展望

以上、〈三劫〉の一貫性を検討した結果、愚童凡夫に始まり自心の本不生を覚るまでの一連の展開と真言門の段階との間に連続性を認めることは難しい。

そこで筆者は、この六無畏と〈三劫〉の対応関係における不整合に基づき、「真言門の菩薩の修行と、愚童凡夫に始まり自心の本不生を覚るに至るまでの修行過程とは、全く異なる枠組みの修行体系である」との仮説を提起する。『大日経』における一貫した修行主体は「真言門より菩薩の行をおこなう菩薩」であるから、住心品でも修行者が真言門を選択するのは必然である。その一方で、人法二無我や自心の本不生を覚る手順を備えた修行体系も並行して存在することが示唆されている。それでも住心品の修行主体は他の過程を経ること無しに直接真言門へ進

(102) 『大日経』住心品における真言門の位置づけ (馬場)

むだろう。しかし、このことは、真言門が人法二無我や自心の本不生を覚るよりも上位の境地から始まることを意味するものではない。真言行を「未来世における智慧の劣った衆生のためのもの」¹⁹⁾と言明する具縁品との整合性を想定すれば、住心品における真言門もまた、入門する修行者に高度な事前準備を要求しないと思われる。以上のように、住心品において、真言門を頂点とする縦の体系が成立する可能性は低い。

では、真言門の最初の菩提心発生に至る過程において、六十心・百六十心など、修行者自らの心へ考察を加える手順は全く反映されていないのだろうか？ いわゆる「如実知自心」については既に拙稿²⁰⁾で検討したが、今回導き出した仮説と照らし合わせて更に住心品の構想した修行体系を掘り下げたいと考えている²¹⁾。

-
- 1) 漢訳は大正蔵第18巻所収, Tib. 訳は, 影印北京版西藏大蔵経 (以下, 北京) 第5巻所収のものを参照した。 2) 大正蔵第39巻所収のものを参照した。 3) 北京第77巻所収のものを参照した。 4) 日本密教の伝統教学における, いわゆる「三劫段」の枠組みは, 『広釈』には存在しないが, 今回取り上げる住心品中の範囲を的確に示した概念であるため, 〈三劫〉の表記によって大枠を転用した。 5) 大正蔵18, p.3c, 北京5, p.243, 23a 参照。 6) 大正蔵18, p.3b, 北京5, p.243, 122a-122b 参照。 7) 大正蔵18, p.3c, 北京5, p.243, 23a 参照。 8) 北京102, p.14, 4b 参照。 9) Yukei Matsunaga, *The Guhyasamāja tantra, a new critical edition*, Osaka, 1978 の p.10 を参照。 10) 漢訳『菩提心離相論』大正蔵32, p.541b と対応する Tib. 訳の北京61, p.285, 42b-43a, 漢訳『菩提心観釋』大正蔵32, p.562a と対応する Tib. 訳の北京61, p.287, 48a とを参照。 11) 大正蔵18, p.46b 参照。 12) 北京5, pp.276-277, 206b-207a 参照。 13) 大正蔵18, p.3b, 北京5, p.243, 122b 参照。 14) 大正蔵39, p.600c 参照。 15) 北京77, pp.125-127, 112a-118b 16) 『経疏』(大正蔵39, p.601c) は瑜祇の語を瑜伽 = yoga- の「女聲」すなわち女性形の yogi- とし, 「相應者」の意味に解釈している。これは *mal ḥbyor pa dag* = *yogin-* の複数形具格 *yogibhiḥ* と *yogi-* の複数形具格 *yogibhiḥ* の一致から生じた解釈と考えられる。そこで, 両訳の原本はどちらも *yogibhiḥ* = 「ヨーガ行者たちによって」であったと推測する。 17) 大正蔵39, p.604c 参照。 18) 北京77, p.127, 118a-b に説明あり。 19) 大正蔵18, p.4c-5a, 北京5, p.244, 26a 20) 『『大日経』住心品における如実知自心の位置づけ』『東洋大学大学院紀要』第44集 (文学研究科), 2008年, pp.193-213 21) この件に関し2009年発行の『東洋大学大学院紀要』第45集 (文学研究科) に論文を投稿予定である。

〈キーワード〉 大日経, 住心品, 六無畏, 三劫, 真言門

(東洋大学大学院)